

# 東京圏におけるエスニック・タウンの形成過程に関する研究 - 竹ノ塚リトルマニラを事例に -

高松宏弥（東京工業大学環境・社会理工学院）

Keyword：竹ノ塚リトルマニラ、エスニック・タウン、フィリピン人、形成過程、東京圏

## 【問題の所在】

本研究の目的は、東京圏における新しいエスニック・タウンの形成過程を明らかにすることである。そのための方策として、本稿では、2010年代以降に形成した東京圏におけるエスニック・タウンの代表事例である、「竹ノ塚リトルマニラ」の形成過程について検討する。

少子高齢化とそれに伴う深刻な労働力不足への対応として、日本政府は外国人労働者の受入拡大を行ってきた。2019年4月からは在留資格の新設により、2019年度からの5年間で最大約34万人の受入を実施するとした。従来から外国人人口が特に多かった東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県などの1都3県からなる東京圏には、全国の約41%の外国人が居住している（法務省「在留外国人統計」）。

このように、外国人人口が増加する日本においても特に多くの外国人が居住する東京圏には、様々なエスニック・タウンが形成している。ここでいうエスニック・タウンとは、異なる社会的・経済的条件を備えるホスト社会において、エスニック集団が適応戦略を採用した結果の産物のことを指す（矢ヶ崎，2008）。

ガイドブック「おさんぽマップ・東京エスニックタウン」（実業之日本社，2013年）や、室橋裕和著『日本の異国——在日外国人の知られざる日常』（晶文社，2019）など、近年、東京近郊のエスニック・タウンを扱ったレポートが相次いで出版されており、人びとのエスニック・タウンに対する関心の高まりがうかがえる。

そこで、本稿では、近年注目を集める東京圏のエスニック・タウンの一つである竹ノ塚リトルマニラを対象に、その形成過程の解明を試みる。

なお、本稿で対象とする東京都足立区竹ノ塚地区は、本来の町名は「竹の塚」とするのが正しいが、一般的に「竹ノ塚リトルマニラ」と表記することが多いため、本稿では東武伊勢崎線の駅名でもある「竹ノ塚」の表記で統一する。

本稿に関連する先行研究として、東京圏におけるエスニック・タウンの形成に関する先行研究について議論する。

これまで「移民政策はとらない」という方針をとってきた日本政府であるが、昨今の人口減少に伴う労働者人口の減少に対応するように外国人労働者の受け入れ拡大を行ってきた。社会学者の渡戸一郎が、東京を「多国籍化・マル

チエスニック化・多言語化が進展」する「多文化都市」であると指摘したように、日本の政治、経済、社会、文化の中心である東京では、特に多様な外国人の集住がみられる（渡戸 2006）（図1参照）。

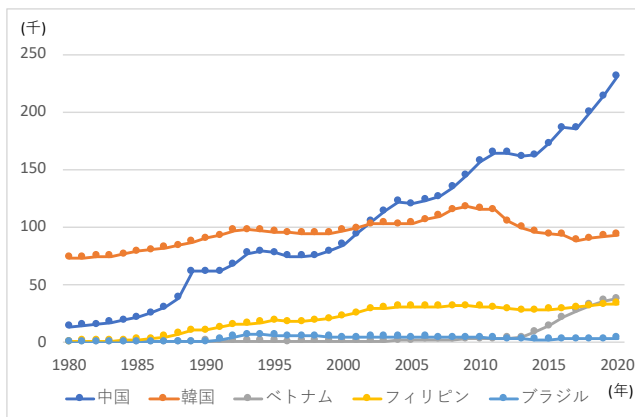


図1. 東京都における外国人人口（国籍別・上位5国籍）

出典：『東京都の人口』より筆者作成

※2016年までは「中国」には台湾籍が、「韓国」には朝鮮籍が含まれる。

図1は、東京都における国籍別の外国人人口の推移を示したものである。従来、日本に居住する外国人の多くは韓国・朝鮮籍の人びとであり、東京都だけでみても、全体の外国人人口のうち6割を超えていた。他方、1980年代後半以降は、日本政府による留学生の受け入れ拡大政策に伴い、日本語学校や大学をはじめとする教育機関が集中する東京では徐々に中国籍の人口が増加していき、現在では約23万人にもものぼる。フィリピン人に目を向けると、ダンサーや興行労働者が増加していった1980年代後半から増加傾向にあり、近年のベトナム籍人口の急激な増加をみせる2010年代後半までは、中国、韓国籍に次いで3番目に人口が多い外国人であった。

つづいて、エスニック・タウンに関する先行研究についてである。これまでも、個別のエスニック・タウンを対象に、形成過程や観光地化について検討を行った研究がみられる（たとえば、申，2015、丸山，2015など）。ほかには、エスニック・ビジネスの集積に伴ってエスニック・タウンが形成することにより、住民や観光客を誘引し、地域社会

や経済の活性化に寄与する可能性についても指摘した研究がある（片岡, 2005、Barret・McEvoy, 2006 など）。その一方で、こうしたエスニック・タウンの形成による、地域社会や経済への影響についての研究は、日本では十分に行われていないという（堀江, 2015）。その理由としては、ほかの先進諸国とくらべて、日本の移民受入は後発であったため、十分な学術的知見の蓄積が乏しく、個々のエスニック・タウンの特殊性を議論することが先決されてきたことなどがあげられる。また、マイノリティ擁護の議論が先行してきたことも要因の一つであると考えられる。しかしながら、少子高齢化や労働力人口の不足に直面する日本社会において、今後ますます影響力が増すことが予測される外国人たちが形成する地域が、日本の地域社会にどのような影響を及ぼすのかという点は、さらなる検討が必要である。

本稿では、こうした先行研究の議論をもとに、多くの外国人が居住する東京におけるエスニック・タウンを対象に、その形成過程について検討する。

### 【研究方法】

すでに述べたように、本稿で扱う竹ノ塚リトルマニラが位置する東京都足立区は、日本で最も多くのフィリピン人が居住する地域の一つである。また、在留フィリピン人コミュニティに関する既存研究は、名古屋市や浜松市などのように、伝統的にフィリピン人が多く居住していた東海地方を対象としたものが多かった（阿部, 2011、高畑, 2012 など）。東海地方を除くと、日本で最も多くのフィリピン人が居住している地域は東京都足立区であるが、足立区に居住するフィリピン人コミュニティを対象とした研究はこれまで行われておらず、なぜ足立区にフィリピン人が集住するようになったのかは十分に検討されてこなかった。

そこで、本稿では以下の2つの問いを設定する。①足立区におけるフィリピン人の集住過程はどのようなものであったか、②竹ノ塚におけるフィリピンパブの集積過程はどのようなものであったか。本稿では、文献・資料の検討に加えて、竹ノ塚のフィリピンパブで働く従業員らに対するインタビュー調査を実施する。以上の問いに対する検討を行い、竹ノ塚リトルマニラの形成過程を明らかにする。

### 【分析結果】

まずは、竹ノ塚の地理的分布について議論する。竹ノ塚は東京都足立区の北部に位置し、東武伊勢崎線「竹ノ塚駅」の周辺地域を指す（図2参照）。



図2. 竹ノ塚の地理的分布

出典：Google Map を用いて筆者作成

竹ノ塚が位置する東京都足立区は、日本で最も多くのフィリピン人が居住する地域の一つであり、隣接する埼玉県川口市や埼玉県草加市にも多くのフィリピン人が居住している（表1参照）。

表1. 日本におけるフィリピン人集住地域  
(上位10市区町村)

	市区町村名	外国人 人口	フィリピン人	
			人口	比率 (%)
1	愛知県豊橋市	18,535	3,791	20.5
2	東京都足立区	33,555	3,759	11.2
3	岐阜県可児市	8,350	3,732	44.5
4	東京都江戸川区	38,045	2,911	7.7
5	埼玉県川口市	37,855	2,596	6.9
6	東京都大田区	25,332	2,526	10.0
7	三重県松阪市	4,566	2,485	54.4
8	岐阜県美濃加茂市	5,464	2,173	40.0
9	岐阜県岐阜市	9,586	2,117	22.1
10	愛知県豊田市	18,997	1,953	10.3

出典：法務省『在留外国人統計』（2019年6月末現在）

表1は日本におけるフィリピン人集住地域の上位10市区町村をまとめたものである。既存研究でも注目されてきたように、愛知県豊橋市、豊田市のほか、岐阜県可児市、美濃加茂市、岐阜市、三重県松阪市と、上位10市区町村中6つの地域が東海地方に位置していることがわかった。それらの地域の多くでは、全体の外国人人口のうち、フィリピン人が占める割合が高く、先行研究でも議論の対象とされてきた一定の理由があることがうかがえる。その一方で、その他の4市区町村はすべて東京圏に位置する地域であり、地域に居住する外国人人口のうち

フィリピン人の比率はそれほど高くないものの、人口の規模が大きいことは無視できない（表2、図3参照）。

表2. 東京都におけるフィリピン人人口の推移  
(上位5区)

	1980年	1990年	2000年	2010年	2011年
総数	1,017	10,898	23,139	31,502	33,818
区部	923	9,398	18,188	24,003	25,298
足立区	16	778	2,386	3,449	3,686
江戸川区	7	593	1,970	2,831	2,921
大田区	26	587	1,562	2,250	2,528
葛飾区	9	362	1,079	1,516	1,683
板橋区	11	350	1,033	1,477	1,618

出典：『東京都の人口』より筆者作成

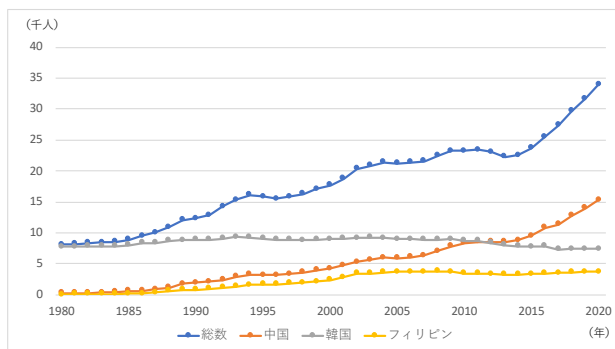


図3. 足立区における外国人人口の推移(1980～2020年、上位3国籍) 出典：『東京都の人口』より筆者作成

※図1と同様、※2016年までは「中国」には台湾籍が、「韓国」には朝鮮籍が含まれる。

表2をみると、足立区をはじめ、東京都におけるフィリピン人人口は、1980年から1990年までの10年間で10倍以上となっており、フィリピン人興行労働者の流入が多かったことがうかがえる。足立区は東京都の区部のうち、1990年時点から一貫してフィリピン人人口が最も多い地域であったことがわかる。図3は、足立区における外国人人口の推移を示したものであるが、やはり、中国人や韓国人にくらべてフィリピン人は相対的にみると少数であり、なぜ竹ノ塚においてフィリピン人の集住地域が形成したかはわからない。

以上の点を明らかにすべく、竹ノ塚のフィリピンパブで働く従業員に対してインタビューを実施し、周辺にカトリック教会が位置することと、職住近接であること、過去にエンターテイナーとして働いていたフィリピン人従業員が元のオーナーから店を譲り受けたことで、竹ノ

塚へのフィリピンパブの集積が進んだことがわかった。

また、以上の要因に加えて、竹ノ塚にフィリピンパブが集積した背景には、近隣の団地に住む高齢男性の集客が見込まれることや、都心からの交通の便の良さがあることを明らかにした。

### 【考察】

本研究では、社会的に注目を集めているものの、既存研究では十分に検討されてこなかった、東京圏における新しいエスニック・タウンの形成過程について検討を行った。本研究は、東京都足立区の竹ノ塚トリマニラを対象に形成過程の解明を行い、外国人の集住が進むことで直面する政策的課題や地域変容について指摘した。

### 【引用・参考文献】

- 阿部亮吾, 2011, 『エスニシティの地理学——移民エスニック空間を問う』古今書院。
- 片岡博美 [2005] 「エスニック・ビジネスを拠点としたエスニックな連帯の形成——浜松市におけるブラジル人のエスニック・ビジネス利用状況をもとに」『地理学評論』78(6): 387-412。
- 高畑幸, 2012, 「大都市の繁華街と移民女性——名古屋市中区栄東地区のフィリピンコミュニティは何を変えたか」『社会学評論』62(4): 504-520。
- 堀江揺子, 2015, 「横浜市中区伊勢佐木モールにおけるエスニックビジネスの進出」『地理空間』8(1): 35-52。
- 丸山奈穂, 2015, 「日本人住民からみた外国人街の観光地化——群馬県大泉町ブラジル人タウンを例に」『観光研究』26(2): 107-15。
- 矢ヶ崎典隆, 2008, 「エスニック集団の適応戦略」『エスニック・ワールド——世界と日本のエスニック社会』明石書店, 20-27。
- 渡戸一郎, 2006, 「地域社会の構造と空間——移動・移民とエスニシティ」似田貝香門監修・町村敬志編『地域社会講座1 地域社会学の視座と方法』東信堂, 110-130。
- 申惠媛, 2016, 「『新大久保』の誕生——雑誌が見た地域の変容」『年報社会学論集』(29): 44-55。
- Barrett, Giles. A. ・ David McEvoy [2006] “The Evolution of Manchester’s Curry Mile: From Suburban Shopping Street to Ethnic Destination” in David H. Kaplan, Wei Li [eds.] Landscapes of the Ethnic Economy, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 193-207.